

末裔から見た移民と日本留学

——祖母や大叔父の足跡をたどる——

神田 稔

1. はじめに

わたし（神田稔）は、2018年10月26日に立命館大学にて開催された「2018年度国際言語文化研究所連続講座：ハワイ日本人移民—150周年から考える」での坂口満宏先生（京都女子大学）による講演のコメンテーターを仰せつかった。

しかしながら、京都女子専門学校とハワイとを結ぶ役割を担う二世留学生を紹介する坂口先生の実証的な研究に対し、その場で思い付いたコメントをするのでは研究の知見を深めることにつながらないと考え、坂口発表が取り上げた二世たちとの比較の意味も含め、「日本で高等教育を受けたハワイ生まれの二世を祖母・大叔父・大伯父にもつ末裔から見た『移民と教育』」という視点から、約40分のプレゼンテーションを行った。なお、主催者のご厚意により、本稿にも写真を掲載している「移民トランク」の実物を会場で展示させていただいた。



写真1 曾祖父や祖母が使用したトランク

本稿では、当日のトークを下敷きに、口頭では触れなかった説明を試みるが、エッセイという形式のため、注釈は省く。また、記述する内容は、現在わたしが知り得る限りの情報（史料／資料）に基づいているけれども、家族・親族からの伝聞ひとつひとつを裏付ける一次資料を発見し検証するのは至難の業であることをご理解いただきたい。なお、諸般の事情により、大伯父である加藤重夫については多く触れていない。

2. トランクから遡行する家族史・移民史

わたしの母方の祖母、神田キミエ（旧姓：加藤）はハワイ生まれの、いわゆる「二世」である。祖母は二重国籍者であったが、その人生のほとんどを日本ですごした。祖母の実弟の加藤二郎もハワイ生まれだが、明治大学留学の期間を除き、ハワイで暮らし、亡くなっている。

今回の連続講座（四回目）で展示したトランク（写真1）を実際に使用したのは、祖母の実父で広島県比婆郡（当時）からハワイに渡航した加藤利作、利作の妻（加藤クメ）、並びに祖母だ

と考えられる。

このトランクの大きな特徴は、購入した「中津商店」(ホノルル)のオリジナル金属プレートが前面に取り付けられ、更に、横浜の「移民宿」である「広島屋」並びに「長野屋」のステッカーが側面に貼られていることである(写真2-1, 2-2, 2-3)。ステッカーの中央には「加藤利作」の名前の痕跡もうっすらと残っている。

「移民が使ったトランク」は珍しくないが、購入店と「移民宿」の両方が特定できるモノは希少であろう。保存状態も良好である。また、二軒の異なる「移民宿」のステッカーは、このトランクが少なくとも二回以上横浜港とホノルル港の間を往復していることを示している。加藤キミエは1920年代半ば、利作は1940年に帰国しており、その後、使用された形跡はないので、トランクがハワイと日本の間を往復した時期は1920年代から1940年までと考えられる。

祖母がハワイ生まれであることは幼い頃から聞かされていた。故に、わたしは、物置の隅に鎮座する古色蒼然とした船旅用の大型のトランクが、祖母や曾祖父の「移民としての人生」を象徴するモノなのだと漠然と感じていた。しかし、祖母を日系アメリカ人として見つめたことはない。

日本に移動させられた後の祖母は、いつの間にか「日本人化」し、戦時中も「アメリカ生まれ」という理由で周囲から差別を受けることはなかったという。「鬼畜米英」の時代に、自分から「私はハワイ生まれです」とカミング・アウトする理由もないので、祖母の出自については、親族以外、知る人は少ない。

なお、祖母の配偶者でわたしの母方の祖父である神田武は、職業軍人ではなかったが、陸軍中尉としてフィリピンと南方戦線で従軍し、九死に一生を得、1946年に復員している。

ハワイ移民一世の加藤利作については、伝聞・ハワイで発行された印刷物・多くの写真・本人が作成した経歴書等により、その主要な足取りが明らかになっている(写真3)。広島県比婆郡帝釈村(当時)という山村の富農に「非相続者」として生ま



写真2-1 「移民宿」広島屋のステッカー



写真2-2 「移民宿」長野屋のステッカー



写真2-3 中津商店(ホノルル)のメタル・プレート



写真3 加藤利作家の家族写真
(左から、加藤クメ、重夫、キミエ、二郎、利作)

れた利作は、十代で横浜港からホノルルに向かう。カウアイ島コロアのサトウキビ耕地での短期間の労働の後、オアフ島ワイパフに転じ、プランテーション労働に従事するのではなく、時計修理販売業者に弟子入りし、その後、幾つかのビジネスを経てワイパフのメインストリートに「加藤商店」（屋号：「現金屋」）を開店する。屋号が示すように、当時の日本式の支払い習慣である「掛け売り」ではなく、近代的な「現金取引」をモットーにしていた。その経営方針が実を結んだのか、商売はたいへん繁盛し（写真4）、結果、三人の子弟（重夫、キミエ、二郎）をすべて日本に送り、高等教育を受けさせた。なお、三人の二世に英語のファースト・ネームやミドル・ネームはない。



写真4 加藤商店「現金屋」の全景（ワイパフ）

3. 加藤キミエと日本就学

わたしの母方の祖母、キミエは、地元ワイパフでの英語での初等教育と日本語学校を経て、単身、太平洋を渡り、広島市内の私立・進徳高等女学校に入学した（写真5）。

この行為は「生まれた国から見知らぬ国への移動」であり、まさに「移民そのもの」である。祖母のような、留学／就学してそのまま日本に定住した「元二世」は、石田智恵（早稲田大学）による指摘のように、「『移民すること』で『移民でなくなる』」という「論理的な整合性がないにもかかわらず、普通の事として受け入れられる逆説」を示し、「移民とは誰のことか」という議論を活性化するかもしれないが、本稿ではこの議論は控える。

加藤キミエは1908年（明治42年）にハワイに生まれ、少女時代は英語を母語とし、日本語は家庭内、並びに、実父が深く関係していた曹洞宗系の日本語学校で覚えた。キミエ本人は日本の女学校への進学には乗り気ではなかったが、長男の重夫が先に旧制の広島県立三次中学校



写真5 加藤キミエ（進徳高等女学校時代）

に入学していたこともあり、父母の強い意向に抵抗することはできなかつたようだ（写真6）。

学生寮で暮らしたキミエは、本人の弁によると、「一生懸命」勉強に励んだ。部屋が消灯された後は机を廊下に移動して予習復習をした。なお、祖母は就学（結果的に日本に定住したため「就学」とする）の時期が早く、後年、幾つかの女学校で行われた「二世女子に対する特別な教育（カリキュラム）」は受けていない。

進徳女学校には他にも米国から留学している生徒がおり、互いに助け合った。拙宅に保存されている写真を見ると、「モガ」（モダン・ガール）の文化は広島市にも及んでいたことがわかる。写真7でポーズを取る女学生たちのプロフィールは不明だが、祖母（右上）を含めた4人がすべて日系二世であると推測しても、あながち間違いではない。

キミエは女学校4年制の本科を卒業後、東京の女子美術学校（現在の女子美術大学）刺繍科に入学する。高等女学校に進める女性が少ないなか、東京に移動し、更に専門的な教育を受けられたのは、本人の強い意志と、両親の財力の支えがあつてこそのことであろう。

職業婦人（教師）になる夢をもちつつ、祖母は華族出身の女学生と硬式テニスを楽しむ充実した学生生活をすごすが、しかし、自分の知らない間に進められた縁談のため、やむなく中退。加藤家の遠い親戚である神田家（同じく広島県比婆郡の庄屋）の「非相続者」である神田武と結婚し、公務員で農学研究者であつた武が勤務する奈良県に移動する。その後、夫の転勤で滋賀県や京都府に数年居住した他は奈良県で暮らし、2009年に他界した。享年百であつた。

4. 祖母の実弟、加藤二郎と日本留学

利作の次男として1911年、ワイパフに生まれた二郎は、オアフ島のマノア・ヴァレーにあるMid Pacific Instituteに進学する（写真8, 9）。公立高校に進学する二世が多いなか、大学進学を目的とする私立学校に通えたのも、キミエの場合と同じく、利作の経済的成功が背後にある。二郎は、勉学とともに音楽やスポーツもこの学校（通称：ミッドパック）で覚えた。

その後、二郎は東京の明治大学に入学する（写真10）。先行研究でも明らかのように、当時、ハワイの二世が、地元ハワイや米国本土ではなく、日本の大学に留学することは珍しくなかつた。



写真6 加藤重夫と加藤キミエ
（広島県で撮影）



写真7 女学校時代の加藤キミエと同級生（広島市で撮影）



写真8 加藤二郎（ミッドパシフィック・インスティテュート時代）

日本の有名大学卒という学歴は、ハワイに戻った後も、ある種のステイタスになった。また、米日の為替の関係で、ひとりの子弟をハワイの大学で教育を受けさせる総費用でふたり以上の子弟を日本の旧制中学・女学校・大学に入学させても、ハワイからの仕送りで授業料や生活費をカバーできたという。このような経済的事由も「二世の日本留学」が活発化した原因のひとつと考えられる。

さて、二郎の明治大学における活動は、皮肉なことに、あまり得意ではなかったアメリカン・フットボールの選手（写真11）として、また、幼少期に広島県からカリフォルニア州へ移住した経験をもつ松本瀧藏教授が設立した、二世男子のみによる学生社交組織（フラタニティー）「シグマ・ヌ・カッパ」のメンバーとしてその姿が残されている（写真12）。

明治大学はハワイや米国本土の二世を受け入れた大学のひとつであり、松本瀧藏のような米国の文化・スポーツ（野球やアメリカン・フットボール）に詳しい教授が二世の面倒をみたこともあり、他の大学に先んじてアメリカン・フットボール部が創設された。諸説あるが、関西学院大学OBで日本のアメリカン・フットボール史を研究する川口仁によれば、日本で最初のカレッジ・フットボールの公式戦は、明治大学在籍の二世チームと明治大学以外の二世を集めたチームとの試合であり、二郎もその試合に出場している。

なお、日系アメリカ人二世が日本のアメリカン・フットボール黎明期に果たした役割については、『1934 フットボール元年―父”ポール・ラッシュの真実』井尻俊之・白石孝次、に詳しい。同書には「東京學生米式蹴球聯盟」の評議員のひとりとして、また、明治大学の選手として加藤二郎の名前が記載されている。二郎は、関東の大学リーグ戦だけでなく、関西の大学や来日した米国の大学チームとの試合にも出場しており、中心的な選手であったことは間違いない。

明治大学時代の二郎は、フットボールだけでなく、仲間の二世たちと生まれて初めてスキーに興じるなど、学生生活を楽しんだ。また、既に日本で結婚し、長女を出産していた実姉のキミエとも再会している。二郎とキミエは流暢な英語で会話したので、英語が不得手な神田武（わたしの祖父）が「君たちは日本人なのだから日本語で話せ！」と叫んだというエピソードが残っている。なお、キミエの長女、美代子はわたしの実母である。

なお、前述したように、二郎は英語の名前をもたない二世であっ



写真9 加藤二郎（ミッドパシフィック・インスティテュート時代）



写真10 加藤二郎(明治大学時代)



写真11 明治大学アメリカンフットボール部の加藤二郎

たが、日本に留学する前に日本国籍を返上し「100%の米国人」として来日していた。これが、当時のハワイ日系人社会で起こっていた「日本国籍返還運動」の動きに呼応した行為であったのかどうかは不明だが、加藤二朗には留学の後そのまま日本に定住する予定はなく、1941年にはハワイで父親の事業を継承している。ただし、12月7日（現地時間）の朝に二朗を含めた加藤家の運命は大きく変わることになる。ワイパフは真珠湾から遠くない位置にある。

日本に定住した実姉のキミエは、実弟とは異なり、自身の国籍について無頓着であった。1960年代に日本で一般人の海外渡航が可能になり、パスポートを申請した際、自分に米国籍が残っていることを知り驚いたエピソードが残っている。

キミエのアイデンティティは「日本人」であり、「日系アメリカ人」はおろか「二世」あるいは「元二世」という意識さえなかったようにわたしは感じていた。但し、満99歳を祝う白寿の席で、

部屋を走り回る親戚の子どもたちを、ハワイ訛りのない完璧な発音で“Sit down, boys!”と叱りつけた祖母は、自分が意識しようとしまいと、少女期に「ハワイ生まれの二世」として身に着けた文化を、そして、広島市の女学校や東京の女子美術専門学校に覚えた大正デモクラシーから昭和初期の日本のモダンな都市生活者の教養やスタイルを百歳まで保持していた。余談だが、祖母の日本語はハワイの日本語学校で覚えた「標準語」であり、広島訛りはまったくなかった。関西に長く暮らしたため、祖母の闊達な東京弁はたびたび周囲を驚かせた。

5. 加藤家と二世たち：教育とその後のナラティブ

①「日本人男子との結婚と日本定住」を前提として広島市内の高等女学校に入学させられ、東京の専門学校に進んだ長女の加藤キミエ、②ハワイに戻り、父親の商売を継ぐことを前提に明治大学に入学したものの、勉学の他、日本にアメリカン・フットボールという競技を伝えるパイオニアの役割を担うことになる次男の加藤二朗、③広島の旧制中学を出てハワイに帰ったものの、父親の事業を継承せず、卓越した語学力と商店経営の経験を生かし、戦後はGHQのPXや進駐軍兵士などを相手（日本人客には石原裕次郎もいた）に赤坂（現在の「ANA インターコンチネンタルホテル東京」の敷地内）で輸入食料品などを扱う会社（American Pacific Trading Company [通称:AmPac Store]）を営み、東京で他界した長男の加藤重夫。

これら三名はすべて「日本で教育を受けた二世」ではあるが、「日本での教育」がそれぞれの

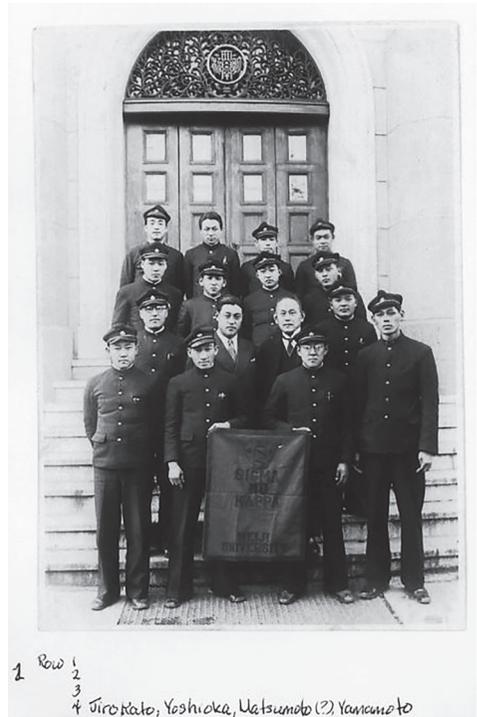


写真 12 明治大学の日系二世プラタニティー
「シグマ・ヌ・カツバ」

その後の人生に与えた影響は様々である。

例えば、二郎は、帰国後、日本語を忘れないため、また、ハワイに帰った明治大学時代の学友と持続して交流するため、「日本語で話す会」という非公式の集まりを定期的に開いていたという。そして、このような活動が、真珠湾攻撃の翌日にFBIが自宅捜索を行い、二郎を拘束し、合計8回もの尋問を続けた原因のひとつになる。もし、二郎がハワイや米国本土の大学に進学したとすれば、その後、「日本語を話す会」を主催したであろうか。明治大学での四年間は、二郎に「日本語を忘れずにいよう」という強い意志を植え付けたのではないか。

日本の明治大学卒で、有名な商店主の息子で、バイリンガルであった加藤二郎は、サンド・アイランドやホノウリウリ収容所、もしくは本土の抑留所に送致されてもおかしくない立場の人物であったが、戦前に日本国籍を返上していたことや、隠し財産がなかったことが幸いし、結果的に、辛くも収容をまぬがれた。以上は二郎の妻である加藤チヨからの伝聞であるが、信頼性は決して低くない。

わたしの大叔母にあたる加藤チヨは、福島県にルーツをもつハワイ生まれの二世で、戦時中のことについて決して口を開かなかつた二郎を代弁するかのようになり、生前、当時の様子を語ってくれた。そのなかには「ミノルさん、あの頃、イヌがおったんよ」という際どい日本語ワードもあるのだが、その「日系社会の内通者」＝「イヌ」が、加藤二郎を危険人物として当局に通報したのか、しなかったのか。これらの二世がすべて他界した現在、真実を知る術もない。

加藤商店は、戦時中、生活雑貨の小売という主要事業をやむなく中断し、サンドイッチの製造と小売りで糊口をしのいだ。その後、事業を閉じ、二郎は自動車販売関係の仕事に従事し、五人の子どもを育て、1998年にハワイで逝去している。長男の重夫は日本人女性と再婚し、赤坂の土地と店舗が1964年の東京オリンピック前の再開発のために強制的に接収された後は世田谷区に居を構えるが、若くして病死している。会う機会がなかったことが、わたしには残念でならない。日本を終の棲家とした重夫は、ハワイで習得した英語力と日本で受けた高等教育や人脈を生かし、ハワイと日本の両国でビジネスマンとして活躍した二世であった。

加藤キミエは、結婚後、神田キミエとして関西地方で暮らす、「日本語学校に通うのが嫌だったこと」以外にハワイでの少女時代について積極的に話すことはなかった。ただ、全盛期の加藤商店「現金屋」の写真（写真4）だけは大切に扱うようわたしに強く諭した。なお、この写真が撮影された当時、キミエと二郎は日本にいたため、写真にふたりの姿はない。右端が加藤利作夫妻、中央が加藤重夫夫妻（当時）である。

6. 一世：加藤利作について

これら三人の二世たちの父母についても触れておきたい。加藤利作（写真13）はオアフ島ワイパフにおいて、いわゆる総合雑貨食料品店の経営者として成功し、ワイパフ商人組合の組合長を務め、同時に、曹洞宗の熱心な信者／後援者としてハワイで最初の曹洞宗布教所の設立に関わり、曹洞宗ハワイ別院の役員も務め、更に、曹洞宗が運営するワイパフ日本語学校の学務委員長等を歴任した。

このように、ビジネスだけでなく、地元の日系社会を支えるコミュニティ・リーダーとして



写真 13 加藤利作

も活躍した利作だが、1940年に帰郷。翌年に日米戦争が勃発。その後は故郷の帝釈村から遠くない広島県比婆郡西城町（現在の庄原市）で洋服雑貨の小売店を開店～経営、1967年に死去している。

1940年という利作の帰国年は、数多くの日本人が移住地から里帰りした「紀元2600年記念行事」に合わせたとも推察できるが、証拠はない。移民社会に貢献したという理由で近衛文麿から賞状を拝受した、と自筆の経歴書にあるが、実物は確認できていない。しかし、1941年発行の『布哇日本人実業紹介誌』（布哇報知社）には加藤商店の店主として次男の二郎の名前があり、利作は「錦衣帰郷」を果たしたと解釈できる。利作は戦後、長男の重夫や長女のキミエとも機会を見つけて再会している。

わたし自身、幼い頃、年に一度はこの「ひいおじいさん」を広島県を訪ねてはいたが、「ハワイ移民一世としての人生」について認識できる年齢ではなかった。ただ、その体躯と声の大きさと存在感には圧倒された。早食いをした私に「稔、しっかり噛みなさい」と注意した利作の姿は、半世紀を過ぎてわたしの脳裏に刻み付けられている。

前述したように、利作は帰国後もひとりで小売業を続ける。投資の失敗などにより、店舗は小さいものの、「現金屋」というハワイ時代の屋号をそのまま名乗った（写真14）。経営者にとり「屋号」は自身のアイデンティティに等しい。同じ屋号を使い続けた事実は、利作がハワイでの成功者としての誇りを胸に残りの人生を生き証であろう。

更に、移民先で教育の大切さを痛感したからか、利作は故郷の村のいくつもの小学校に多額の寄付を行っている。利作の移民経験は、ハワイのワイパフでの経済的成功だけに留まるものではなかった。なお、利作の妻、クメは病弱で、利作より先に日本に帰国し、療養していたが、1931年（昭和6年）長女のキミエに看取られ、病死している。

7. 「帰米二世」とは誰のことか

ここで、少し議論の方向を変えたい。キーワードは「帰米二世」である。わたしの大叔父と大伯父は「帰米二世」である。ただし、日本で受けたのは高等教育であり、留学時には既に英語を母語とするバイリンガルであった。従って「帰米二世」という言葉がもつ強いイメージ、すなわち、「米国生まれで米国籍を有するものの、幼少期から少年期に日本で教育を受け、日本寄りの思想を持ち、英語が不得手な二世」からははみ出している。大叔父は日本語の読み書きができたし、同じく英日両語を操った大伯父は、経営者として東京で成功している。この兄弟は決して「英語が不得手なため、米国で仕事を見つけるのに苦労した帰米二世」ではない。

物部ひろみ（同志社大学）の言葉を借りれば、ふたりは「ハワイの年長二世」であり、後年、いわゆる「二世部隊」に志願する若い二世たちより上の世代になる。そして、「ハワイの年長二世」

は決して少なくなかったのである。

このような「思い込み」は研究の現場でも見られる。数年前、ある学会において、日本人大学院生が『『帰米二世』 = 『日本寄り』 = 『英語が下手』 = 『米国では就職に苦労した』』という「帰米二世像」に基づいて口頭発表をした。この捉え方を帰米二世全般を議論してくれては困るので、わたしは「私の大叔父や大伯父も帰米二世でしたが、あなたの言う『帰米二世』とはまったく別の性質を持つ人たちです」と指摘したが、なかなか理解してもらえなかった。



写真 14 現金屋商店（広島県比婆郡西城町 [当時]）

た。Tule Lake 強制収容所などでの「帰米二世」の立場や行動が、このような「帰米二世への先入観」を増幅し定着させるのかもしれないが、いずれにせよ、移民研究において、丁寧に扱うべきキーワードのひとつであろう。

8. 「マージナル・マン」としての「帰米二世」像

以前、「移民研究会」（東京）において本稿の内容と重なる口頭発表をする前、その準備のため、一冊の書籍（森本豊富編『移動する境界人—「移民」という生き方』）を入手した。わたしの曾祖父母、祖母、大叔父、大伯父は、好むと好まざるとにかかわらず、「移動する境界人—『移民』」として生きてきたからである。しかしながら、その研究態度や方法には納得しかねる部分がある。同書は、帰米二世を「文化的葛藤を自覚し、二つの自我にさいなまれ、不安定な分裂したパーソナリティの状態が持続した境界人（マージナル・マン）」と仮定し、数多くの帰米二世に調査を行った上で上梓されている。

しかしながら、調査の結論として、帰米二世には「文化的葛藤を自覚し、二つの自我にさいなまれ、不安定な分裂したパーソナリティの状態が持続した形跡はない。」とし、「葛藤はあったとしても、分裂したパーソナリティになることはなく、戦略的に急場をしのぐことで時代の荒波をうまくかいくぐっていったと言ってよからう。」と推論し、最後に「回答者の中には、いわゆる社会逸脱者はいない。このことは、しかしながら帰米二世の中にそのような人物が存在しないということを意味していない。調査に協力するという時点で、すでにフィルターがかかっていると言えるかもしれない。また、自らの人生を他者に開示するときに、自己否定につながる言説は避ける意思が無意識のうちにも働いていた可能性もある。」と、研究の方法論と結果について正当化している。

本当に、「調査に協力した帰米二世」が「フィルターがかかった帰米二世」なら、「調査に協力しなかった帰米二世」が「フィルターがかからない帰米二世」なのだろうか。そもそも「分裂したパーソナリティになる」とはいかなる精神状態を指すのか。「マージナル・マン」は古く

から社会学等で使われてきたフレームワークである。「互いに異質な二つの社会・文化集団の境界に位置し、その両方の影響を受けながら、いずれにも完全に帰属できない人間のこと。社会的には被差別者、思想においては創造的人間となりうる。境界人。周辺人。」(大辞林)のサンプルとして婦米二世を取り上げることにわたしも異論はない、が、婦米二世は「不安定な分裂したパーソナリティ」を有しており、その中には、研究者の仮説通り、必ず「社会逸脱者」が存在するのだろうか。存在しなければならないのだろうか。

この問いかけに対する確かな答えを得ることは容易ではない。婦米二世が引き受けた代表的な苦難は米日の開戦であろう。今さら言うまでもなく、先の戦争は、日系アメリカ人とその社会に計り知れない影響を及ぼした。加藤二郎は、米国籍しかもたない米国人であるにもかかわらず、日本への協力者という疑義により米国当局に拘束され、既に述べたように、執拗な尋問を受けている。神田(加藤)キミエも、戦時中、配偶者である神田武の出征、生まれたハワイに暮らす実弟や実兄との分断など、まさに「辛い時代」「HARD TIMES」を経験している。

これらの事実と『『マージナル・マン』』としての『婦米二世』』が附合する局面はあるだろう。しかし、だからといって、婦米二世ではないものの、多かれ少なかれ「互いに異質な二つの社会・文化集団の境界に位置」していた祖母と共に生活し、また、ハワイ在住の婦米二世の大叔父とも、中学生の頃から親しく交流してきたわたしには、このふたりに「不安定な分裂したパーソナリティの状態が持続」した時期があって当然だ、とは思えない。その足跡が上記のふたりほど明らかでない大伯父についてもそうだ。

以上の方法・仮説・結論に、わたしの主観だけで対峙することはできないことは承知しているが、「マージナル・マン」あるいは「マージナリティ」という枠組みを婦米二世にスッポリと当てはめ、その特徴を「パーソナリティ」にまで一気に飛躍させることには違和感を禁じえない。

むしろ、「マージナル・マン」が有する「自分の中の文化的・社会的な境界性」を、このような「負の方向」ではなく「正の方向」と解釈し、「独自のポジションを創造的に獲得する存在」として婦米二世を捉えなおすのであれば、「マージナル・マン」を単なる「パーソナリティの類型」から解放することができるのではないだろうか。わたしが、移民の末裔として、祖母、大伯父、大伯父のライフ・ヒストリーから見えるのは、「マージナリティ」を負として抱え込み、苦悶する姿ではなく、その反対である。

9. 現象学的社会学の視点

同志社大学文学部社会学科社会学専攻(現在の社会学部社会学専攻)でのわたしの卒業論文のテーマは、アルフレッド・シュッツやピーター・バーガーが提唱した現象学的社会学であった。

現象学的社会学は、人びとが普段あたりまえのように生き、暮らしている世界、いわゆる「日常生活世界」における現実を「至高の現実」として重要視し、従来「あたりまえ」として退けられてきたこと、すなわち「自明性」に根底的な疑問を投げかけ、「相互主観的(間主観的)」に作られ変化する「意味の網目」の中で生きるダイナミックな人間のあり方を解明するための社会学理論である。

婦米二世を扱う場合も、過去に婦米二世に対して貼られたラベル、要するに「典型的なイメー

ジ」や「類型的な知」をいったん括弧に入れ、その上で、様々な方法を駆使することにより、ようやく「他者とつながり、他者を理解できる可能性や、既存の日常を超えるきっかけや手がかりと出会える」（好井裕明）のだと思うが、どうだろうか。

10. アジア系アメリカ文学から読み解く

フィクションの世界から移民や婦米二世を再考することも大いに可能である。

英米文学研究者で、フルブライト留学生としてサンフランシスコに留学し、その後、ローレンス・ファーリングティの詩やボブ・ディランの歌詞の翻訳を片桐ユズルと手掛け、ジョン・オカダ『ノーノー・ボーイ』を翻訳した故・中山容（京都精華大学教授 [当時]）は、わたしのなかに「アジア系アメリカ文学への扉」を開けてくれた。

例えば、近年の作品として、作家ナオミ・ヒラハラの筆による人気推理小説シリーズ（邦訳に『ガサガサ・ガール』、『スネークスキン三味線』等がある）の主人公、マス・アライに付与されたユニークなキャラクターと独白や物語の展開に、フィクションでしか表現できない「婦米二世のセンチメント」を読み取ることは可能である。

「婦米二世でヒロシマのヒバクシャの気難しい庭師（ガーデナー）」であるマス・アライは、周囲から「旧式のピックアップ・トラックに乗る英語が不得手で頑固で昔気質の“KIBEI”老人」と信じられている（まさに「類型化」だ）が、実は、頭脳明晰なバイリンガルで、米日両国の世界観や自然観に精通する「玄人はだしの探偵」でもある。

また、徴兵拒否者を描いているにもかかわらず、前述した、題名が“NO-NO BOY”であることで、時には歴史学者から批判にさらされる小説『ノーノー・ボーイ』は、現在、川井龍介による新訳で読むことができるが、その主人公、イチロー・ヤマダが作品のなかでしばしば繰り返す「長い自問自答」は、マス・アライの独白とどこかで共鳴している。イチローは婦米二世ではないが、徴兵拒否を選んだことで、「マージナルな存在」を引き受けざるをえないキャラクターである。

以上の作品を含め、現在までに蓄積された膨大で多様なアジア系アメリカ文学の作品群は、わたしたちに、アジア系アメリカの移民や日系アメリカ人二世、婦米二世などを理解するヒントを与えてくれると確信している。

11. おわりに

本稿のテーマは「移民の末裔から見たハワイ移民と日本留学」である。では、「末裔が移民を語る意味」は那邊にあるのだろうか。

いうまでもないが、「移民の末裔」だから移民を正しく理解できるわけではなく、かといって、「末裔」だから鼠兎の引き倒しに終わるわけでもない。

家族や親族という物理的かつ精神的に近い存在について、実家に保存された資料や伝聞を整理し、ミクロな家族史を綴ることができる「便利な立場」にわたしはいる。本稿に登場する人物はすべて実名である。通常の研究では仮名や記号に置き換えることがほとんどだろうが、

ここでは「末裔の特権」を行使させていただいた。しかし、だからといって、これらがすべてプラスに働くとは限らない。

例えば、家族・親族とはいえ、「プライベートを文字にしていいいのだろうか」という強い葛藤はいつもついて回る。近い存在であるからこそ深く踏み込めず、事実を一それが特定少数であろうと不特定多数であろうと—他人に明らかにすることがためられる場面も少なくない。

余談になるが、ある歴史研究者が、わたしが行った「家族史・移民史」についての某研究会での口頭発表を、「気楽な発表」だと評したことがある。その人には「身内のエピソードを羅列した気楽な研究発表」に見えたのだろう。その批判は甘んじて受ける。しかし、くどいようだが、身内を語ることは決して「気楽」な行為ではない。書かれた手紙や印刷された新聞やマイクロフィルムを網羅的に調べるのは気の遠くなる作業だろう、が、それだけが「研究」に値するのだろうか。

以上、結論のない文章になったが、もし『『移民の末裔』だからこそ可視化できる『移民のリアル』』があると仮定すれば—それが何なのかはまだ言語化できないもの—わたしが試みた「家族史と移民史を重ねる」行為にも、幾ばくかの意義があるのかもしれない。同時に、「『移民の末裔』として先祖に向き合うこと」により、「わたし自身のアイデンティティが書き換えられ、鍛えられつつある」という感覚は大切にしていきたい。

「書くということは、他人に自分をおしつけることだ。」とは米国の女性作家、ジョーン・ディディオンの言葉である。青山南は「ディディオンの『わたし』たちは、じつは、『わたし』に自信がない。他人にほんとうにじぶんの話伝えることができるのかどうか、不安でしかたがないし、主張する『わたし』なんてものがほんとうにあるのかどうか、それもとても心配なのである。」とディディオンの著書『ベツレヘムに向け、身を固めて』の「訳者あとがき」に記している。

このエッセイを書き終わった「わたし」の心情は、ディディオンの感覚に似て、「とても心配なのである」が、「わたし」には、「心配」を煮詰めたり薄めたりせずそのまま提示することしできないので、そうしてみた。ご批判ご助言を賜れば幸いである。

追記：文中の写真はすべて神田家所蔵のものである。